源語奥旨全

文治乃年中にうつり。高山の末。恠山乃
出来たり。されども高山の末つ。玉川
の北さやく北世界ゝくさ。さて世界乃とをく
乃。天乃底魚咋すゝ多ゝ。多ゝうつこ
ゝ。撥真こうさ上こく。此家長乃新おん
かこゝ。ゝ多まへる。わすゝ北利縁等。雄
こゝ九。五つ常号北ゝ来安ゝは。

許寄
九曜文庫

さる女房。古代ちよの月乃大堰川。下
出る世にしたがふ。男はすみなし九
秋よるくれつかた。あきのの。やさしく
花やかにゆくすゑなど。さかしく　よそほし
それと。なぎさの紫乃は。おもふ事に　えんに
うかれし九。ゆかしきものやあなる。みちのきど。此
すへさまれ一帖なる。さればみなくゆるもと

うつせしとく。あまた河海乃波てりこのに。
あるは鷺鳥乃いろおきかへて。あまおほらひ。
まつひす。玉乃小くし。すまやうに　やまと和
まつるも妙のこ。日本紀乃清名のこれ
なし。古俵乃藤井。浪には萩原おもれ
しゆりにくきくとみすまよそまふれども。なほ
まもやのことまで。よくのたへりとおもひえず。

いま近き孫常〻のこの事乃すきひとん
往き。なほこれの母とゝの書めんを。のく古ち
と思ひ今さまに。今ほまくいと却ほまをの
しほ人多ちに。さらに此すちまをいひ及
ちさまも者く。このめをく。をのく
本此ほ。ゝ於又毎垣内家に汝に
末入者こゝろ。家と代ほく。このをのめ

ほとゝ者ゝ事ゝ。一ゝ多ひふをめちさ
研毋古に要ほ思ひれさほを。
古往ほ。ゝ乃ほゝを。古ほのゝ。
名今乃西ゝ九者れる。此の大唐代の
光ふよれちるへゝ。こを思へ陽。者く
をのおみ。此物語ゝ法ゝ也を第ゝ終ゝ
ほ。この人ゝゝ日ほ往ほみ多む也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神武天皇紀元二千五百六十五年

十二月

本居豐穎

源語奥旨

近藤芳樹著

明治五年の。東京日新堂の日誌に。方今文明日進。學校の盛なること。古來以為たる嘗てなかりざる所なり。就中西京において。中小學の設け大に備はれり云々の末に。西京乃女子も。從來容貌の美を以て。天下に冠たる者なるを。今まこと才學を研ふに。善を尽し美を盡さんと願ふ。古昔紫式部清少納言等。才且美なりしが如くなるべし。到底實用の學にあらず。今一兩年を經て西京の女子。豈

此輩乃下ゐのらんやとあるを聞て。予大に感じをおもへらく。予少年の時より。鬚を撚る結丈夫たるの。式部の著せる源氏物語を好む。特結末香をゝのうた渉獵し。猶補注をきへせんとおもひつゝ。此日誌をよゝく猛省をもとむ。實ゝ赧顔の至りなり。故ゐ其志を翻し。はひゐ筆を拋ちたりき。此頃夏日の長支に倦て。机ゝ倚りかゝりて。ねぶえむ一睡したりしゐ。はるけきその紀上鶉の女房。予が側ゐ来たりて。以ての憂思を帯るゐめもちにて。予に以屈らく。妾も一条のみかどゝ結きその紀上東門

院ゝ仕屈し。式部と以ふ女あり。妾むかし源氏物語を著はしゝあるに。もむ人妾が深意のある處をしらざ。たゞその文辞をのゝ善しゝ。徒らゐ好色の媒ときり。妾實ゝられを愧づ。抑此物語も。のゝと權臣の跋扈を憎む。皇族の衰微を憂屈し著せる昏あり。其方ゝ為る如く。仁德天皇の。炊煙の乏しくなるを見そなはしゝ。三年の調賦を免しぬゝるゝは。一人の御仁心を及ぼしゝ。萬民を救ふ御仁政とゐしゝあるなり。これ天下を御心のまゝまゝあゝ治びあり。然るを延喜の帝ゝ至りては。冬の夜。貧民の寒きゝ堪ざん

ことをおぼしめしく。御衣を脱きおはしましき。そ
乃叡慮も難有けれども。此時貧民を救はせらるゝ詔
を聞くに。かく一人も御仁心おはしまさぬ。萬民も
おのゝ〳〵あふ御仁政のなるのしは。いかにいふに。權
臣の勢ひ強くして。天下を叡慮乃まゝえまほりごもた
まふこと能はざりしゆゑなり。さるより。寛平上皇乃
菅公を抜擢し。冷泉のみかどは西宮殿を登庸しあく宜
しき。さなその權臣の偏執より貶降せらるゝを。たまく他
氏の政を預る者をば。うくく乃如く鋤き除きいとも尊こ

き一世二世の皇族なり。さることくく其門は家禮を尚
らむるに至る。世の中は多く藤氏の掌握に帰したる
を。一人ぞうゝ眉を顰めし者をうるぞ。妾心はうゝ紙
憤るを以て。婦人の身なれば。いかんともをんなる
なり。こゝをもて此物語を著はせり。其大旨は。先
に源氏の君と。攝家の嫡子頭中將とを對偶して。頭中
將。この源氏の君に仕ふるは。全く主從の如きさまにつ
くりなり。それより次第の昇進は。源氏を。頭中將は
ずゝ上等はすゝめ。皇族はうくべき物をといふことを

示し。源氏の子夕霧の君は至てと。頭中将の子柏木。其外の諸子を對耦とす。猶夕霧を上等とす。まゝ皇后も。當時はた。さは藤氏あらでい居るはぬこの例なるを。はじめは源氏の君乃養女。六条の御息所の御女を入内せし。後は源氏乃實子明石の姫君を入内せて。共に中宮とす。その御腹の旬兵部卿宮も。東宮はもはゝ。まさねど。夕霧の弟。女三の宮腹の薫大将を始め攝家の諸子孫も戴き重んじて。東宮と同じさまは。敬ひつゝく如く作りあゝたまゝ。見る人さゝ文章はめて

心をよせたりしまゝは。こゝに眼を着るものなりき。さまゝど實をかく。筆の鋒を以てだは。攝籙の勢を挫ぐ。皇族を尊とくせんとせし。その苦心。なのく等閑のことあらざりしぞ。今や聖天子御位を継ぎ給ひて攝關將軍を廢せらゝ。庶政を古乃復しあるに妾が蓄懐もさに晴て。泉下の欝念も頓は散せり。然るを其方。半生の力を此昏は尽しあらん。更に妾が深意を解きば。日誌をもて。忽ちは此學を廢せんとせるを。さてく愚のある者のなと云て。はづく一ゝ立去りぬる。目覺めく枕もとげた

迄ば。蟬の聲さやかに耳まいり夕日の影すでに西に傾
けり。さるまでも怪しき夢を見しこのあと。つくづく思へば。
實に式部が此書を作まるい。此意なりてのことなるべし。
されど當時。一條の帝。此物語を見給ふて。式部い日本紀
をよく讀める女なるべし。とのうまひしよし。日本紀の
御局と稱せしとの。帝はこのたまへるは。日本紀。神代
に起りて持統天皇に至迄る。その間數十代。朝威盛んな
るまに。皇族尊とく。諸臣卑しく。上下の分正しかり
しに。奈良の御代以來漸う攝籙の勢ひ強くなり。皇族

の力ますく衰へたるを。式部心に憤りて。上古いかくいか
なりし物をと思ふより。皇族の源氏の君と呼ぶを主と
なし。攝籙の御子頭中將と呼ぶを客とまし。そ迄より次
々に。夕霧柏木匂宮薫大將の類ひの。主客對耦し。空に架
し虚に憑りて。いかにもめでたく作まるく
物なり。權門の嫌疑を憚り。深意を表にはさず。韜を
晦ましてあけりしかど。一人もそのよしを知る人な
りしなど。一條の帝ばかりい。悟らせ給ることなり
を。日本紀をよく讀める女なるとのたまへる。その御言を

つて。ちゝを譽に。誰もく。日本紀の御局といふ稱しなり
しのど。殆千年に近きまで。更ふ其名義を辨ふる人なく。
つゐに皇族を尊ひ。權門を卑しむ。深意の大義いうづる
まはて。彼安藤爲章ご七論もられに及ぎど。藤井高尚
ご日本紀御局考の如きい。殊に迂遠乃說まく。采るに足
らざるを。予しもかく。茅塞を一夢ふ闢けるい。いとも
まてきことになるぎど。あそれ式部。御堂殿の私せんと
ちゝまつりしを。拒そそ從いざる剛腸を以て。王室の衰
微を憂ふる。大志を蓄へなぐ。その意ひとへに。孔子春

秋をなしそもあつるものをつげをこのすめて。慷慨の心を
紙上にのしさぎ。生涯を全くせしは。まことに賢女の鑑
ともいふべく。これを實用の學にいはばいさぎ。何を
ご實用の學とせん。さきば上等の女子まして。此書を學
ばん人い。まつ式部の日記をよく。其自ら矜らで身を慎
みて平常をちり。さく後に學ぶべし。かくらば其人。必ら
ず貞順婉淑。君子の配となりぬく。恥ることあるうん。まこと
西京の女子のをものべ。諸國の婦人。中等より以下の者
の。中小學に入て物學せん心ぎ。日誌にいくるが如

くなるべし

まゝ此物語に。弘徽殿の女御。久しく後宮に侍ひあひて。太子をも産まゐらせ給ひつゝ。後は入内しゐ給へる藤壺乃女御の。それは立后なりし事を記せる。さるに皇后と申すゐふにい。貞静純一の女を選ばせ給へるゆゑに。さらに皇族臣族ゐいかゝはらじとぞいひ給ひける。聖武の御代は。藤原淡海公の女光明子の。夫人より直ちに皇后に陞りゐ給へる。これ其實に藤氏の権威盛んなるゆゑなり。妃はいとゝ多くの夫人を以て。押て皇后とし

給へるものなり。後宮職員令を勘るに。妃は四品以上。夫人に三位以上。嬪は五位以上とあり。これゐよる時に。妃に内親王ゐ。夫人に臣族の貴女。嬪に臣族のうちゐて。やゝ位卑き女なり。故に妃夫人嬪共は。多く御妾なるべきなり。その出自ゐよりて。三等の分ちありて。上等ゞ妃なれば。貞純の女を選ばせ給へゐゐ理ゐいなれども。物ほのゝに必ず内親王の妃たることを。皇后とすべき成。却て夫人なりし光明子を皇后としたりしに。當時淡海公執權にて。勢ひの強うりしを以て故なり。

然れども妃と云ひ夫人と云ふこと紀い。抑紫式部の名目は尊卑の別に。つひにこれを嫌ひ。いつとなく其名を廃し。妃夫人の二負をひとりに併せ。女御と改め。嬪を更衣と改めたること。藤氏の世わざなる。式部に眼を着けく。皇族の藤壺の女御を。藤氏の弘徽殿の女御よりも。きはみ皇后とせるも。上古は妃夫人の差別ありしこと。抑の〻べ。まと皇族を尊とび。藤氏を貶せる結一證とすべきなり。

予近藤翁の門に在て。源語を讀みつゝ。浅見に〻其一斑を窺ふこと能はざりき。然るに翁の卓識。よく〻その奥旨を探究。明らかのみ弁して。讀者を〻て惑ふこと〻なかりしむ。實に讀昏に深切なりと以ふべし。且其文の閑雅なる。始を長日午睡中の一夢に托し。以て徐々に説起して。其要旨を述べ。當時の形勢を論じ。現今實用のことに及ぶ。抑揚の巧なる。翁の筆鋒も。まと皇學なる者の固陋を挫くに足りと云ふべし。然るに此書。源語奥旨と題して。

一冊子となす。源語を読む者の。尤も注意すべき大要を示せるなる旨なるに。始を東京新聞紙中に載せる所の西京女學校の条を借りて筆を起せる。恐らくは。大家の著作に似たるの誹なからんか。夫れ新聞誌なるものい。一時の談柄に備ふるのみにして。一閲し終れば。反古に属するもの多し。源語を讀むばこのりの者。豈新聞誌中の論を信じて。紫式部清少納言を以て。西京進學の婦女子に及ぶべしとせんや。願くバ前後を削り。只長日の一夢より書起しを。當今

實用の事に及ぼし。以て世に公にせんことを。

明治八年五月　井關美清

美清の此説。以ひ拙せく餘蘊なし。仍て前後を削らんとして。思ひ出ることなり昔宋の僧に。居簡と以へる詩人なり。葉水心。その詩集に上生日の詩ある。後論ひて。林下名作將以無遠不可使千載之後集中有上生日詩とのきつけたるを。居簡その詩を除このずして。その語を詩集の端に鏤めたるよりを。五總志に載せく。前輩相與之情類如此と以へり。

予もまゝ顰に倣ひて。西京女子の件を其侭ゝ抄紀。
美清の語を巻末ゝ記せるものなり。

近藤芳樹識

源語奥旨終

明治九年十二月出版

著述者　山口縣士族　近藤芳樹
第三大區拾壹小區四ッ谷
仲町三丁目拾四番地寄留

出版人　松村幸太郎
第壹大區九小區竹川町
拾二番地平民

1

明治九年十二月鼓刻

近藤芳樹著

源語奥旨

寄屋子莽社中藏版